

(要約版)

嗜好品と移民コミュニティ

—カートがつなぐ／断絶するエチオピアにおけるイエメン人社会—

助成研究者 大坪玲子 (東京大学大学院)

目的

カートはイエメン及び東アフリカで栽培・消費される嗜好品で、その新芽を噛むと軽い覚醒作用が得られる。娯楽施設が少ないイエメンでは、カートを噛んで気の合った人々と過ごす午後のひとときは、社交の機会となっている。申請者はこれまでイエメン共和国で聞き取り調査を実施し、カートの生産・流通・消費の特徴を明らかにした。カートは結衆、つまり人々を結ぶ手段として機能する。しかし 1970 年代のようにコミュニティ全員を参加させるほどの結衆の効果はなく、個人的な楽しみも許されるなど消費形態は多様化している。本研究ではエチオピアのイエメン系移民がカートの消費を通して誰とつながっているのか (そして誰とつながっていないのか) を、聞き取り調査を中心に明らかにする。

方法

エチオピアで聞き取り調査を行う。イエメンからエチオピアへの移民の歴史は古いが、主に 20 世紀以降に移民したイエメン系移民を調査対象とする。彼らが誰とカートを噛むのか、そして誰とカートを噛まないのかを聞き取り調査によって明らかにする。彼らの出身地、移住した年、国籍、職業、どこでどのように誰からカートを購入するのか、どこでいつ噛むのかということにも目を配る。聞き取り調査の対象はイエメン系移民に絞るが、彼らがエチオピア人とつながりを持っているのならば、そのつながりもたどる。

結果

2016 年 8 月 10 日～9 月 10 日にエチオピアのジンマ、ナザレト、ディレ・ダワの各都市でイエメン系移民の聞き取り調査を行った。従来のイエメン系移民の研究は東南アジアへの移民で、ハドラミ (イエメンのハドラマウト地方出身者) でなおかつサイド (イスラームの預言者ムハンマドの子孫) を対象としたものが多かった。ハドラミ＝サイドは系譜を維持し、インド洋海域にネットワークを張り巡らせ、アイデンティティを保持する傾向が強い。本研究ではハドラミでもなくサイドでもないイエメン系移民を調査対象とした。エチオピア帝政時代やその後の社会主義政権時代にイエメン系移民は迫害を受けたため、ほとんどの者がイエメンに帰国し、あるいは他の国へ再移住した。現在ジンマ、ナザレト、ディレ・ダワに残っているイエメン系移民は各都市に数軒程度である。

カートの消費方法はイエメン式（カートを片頬に溜め最後に吐き出す）とエチオピア式（カートを噛んだら飲み込む）で異なる。イエメン系移民はエチオピア式でカートを消費する。ロンドンにいるソマリ系移民はカートを噛むことでアイデンティティを保持しているが、エチオピアのイエメン系移民にとってカートを噛むことがアイデンティティの保持につながったり、コミュニティの維持に役立ったりということはない。ジンマやナザレトではカートは個人の嗜好品になった。一方ディレ・ダワではイエメン同様の光景（個人の家に友人が午後に来る、カートを投げて渡す、カートを噛まない人も参加する、テレビを見るなど）がカート会場であるマブラズで日々見られる。しかしここを主催しているのはイエメン系移民であるが、主に集うのはエチオピア人である。ディレ・ダワではカートの結衆の効果は民族を越えて発揮されている。

エチオピアのイエメン系移民は何もコネのなくやってきて、日雇いの仕事から始め、迫害を受けながらも、エチオピアに残ることを選んだ。エチオピア人の母の面倒を見るためという理由が多い。自他ともにイエメン系と認めるあるイエメン系移民は、父系出自原理からすればエチオピア人である。このような人々はアイデンティティの保持に焦点を当て父系出自原理をたどるだけの研究では見落とされてきただろう。

イエメン系移民に「ビラード（故郷）はどこか？」と聞くと、祖先の出身地つまりイエメンやイエメンの州や地方の名称が答えとして返ってきた。その答えから彼らがイエメン人のアイデンティティを保持していると断言するのはたやすい。しかしその一方でエチオピアに残った理由を尋ねると「ここが自分のビラードだから」ともいう。彼らは2つのビラードを持つのである。